



2001 年 (平成 13 年)

6 月号 (No. 673)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

目 次

新生した日本山岳会青年部……	1
2000年度大学山岳部の事故を めぐる個人的考察……	2
新日本山岳誌の編纂について……	4
追悼・小田稔会員逝く……	4
ネパールの皇太子殿下来日……	5
報告 自然保護委・「高尾の森」植樹祭 5 支部だより 北海道・自然児学校の開設を・6 宮崎・『みやざき百山』が受賞 ……	6
秋田・平成12年度定期総会……	7
海外の山……	8
東西南北 「マナスル」にこの人あり……	9
ラリグラスの植林5年……	10
ボリビア日記・3……	12
第4回アンケート結果報告……	14
図書紹介……	18
『生選』『BERG 2001』 『A Passage to Himalaya』 図書受入報告・ルーム日誌……	19
新入会員……	20
会務報告……	21
INFORMATION……	22

▶ 日本山岳会事務局 (含図書室) 取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時

新生した日本山岳会青年部

日本山岳会青年部担当理事・松原尚之

昨年春、二年ばかり活動を休止していた日本山岳会青年部を再興することになった。一九九八年の秋に日本山岳会学生部隊でブータンの未踏峰にのぞんだ若い世代がその中核メンバーだった。もはや青年とは言えない年齢にさしかかった私は、彼らに尻を押されるようにして、その代

表をつとめることになった。青年部は、一九九六年のK2登山を皮切りに、九七年ダウラギリ、九八年カンチェンジュンガと、ヒマラヤのジャイアンツに近年立て続けに登山隊を送った。若いメンバーを主体としたこれらの試みは意義深いものであったが、国内での継続的な登山活動には、どうもうまく結びつい

ていかなかった。もともとヒマラヤ志向の強いメンバーが中心になっていたせいもあったかもしれない。

今、青年部の代表をつとめる私の元には、毎週のように、青年部のメンバーからの登山計画書が(たいていはEメールで)送られてくる。行き先は、後立山や上越の雪稜あり、アイスクライミングあり、湯河原幕岩ありと、バラエティーに富んでいる。平日のクライミング・ジムへの誘いも多い。このようなことは、ふつうの社会人山岳会では当たり前のことだと思ふけれど、青年部でそれがなされるようになったことが、十年来この組織に関わってきた私には単純にうれしい。こうした活動の中

からまた仲間が集い、ヒマラヤや他の海外の山に向かう者も間違いなく出るだろう。

また青年部では会報『きりぎりす』を現在三号まで発刊し、今後も季刊のペースで出していく予定である。ふつうこのような会報を作る場合、原稿集めに苦労するものだが、『きりぎりす』に関しては、締め切りを守ってもらうことに腐心はするものの、良質な原稿が毎号十分に集まってくる。インターネットは、青年部に限らず若い登山者たちの新たなコミュニケーション手段の重要な柱となりつつあるが、それとともに私たちは印刷された活字という表現媒体もまた欲していたのかもしれない。

現在、若い人たちが山を志す場合、社会人山岳会に入るというのも有力な選択肢である。そうした環境下であえて日本山岳会というやや旧弊な

大組織の傘下にある青年部に集まったメンバーを大事にしていきたいと思う。また、海外の山岳会との豊富なネットワークや、人脈、組織力など、日本山岳会ならではのメリットを、うまく青年部の活動に活かしていくことは今後の課題だ。ともあれ、より多くの意欲ある登山者に、青年部の仲間に加わってほしいというのが、私の偽らざる気持ちである。

個人的に青年部の活動を再開してよかったことは、仲間たちから刺激を受けることである。ここ数年、やや低調だった自分の山へのモチベーションが、最近だいたいぶみがえってきた。青年部を再開して悪かったことも、やはりこの刺激を受けることだろう。せっかく真面目に本でも書こうと思っているのに、ついこの週末も、またクライミングに出かけてしまうのだ。

二〇〇〇年度大学山岳部の事故をめぐる個人的考察

一橋大学山岳部OB・宗像 充

昨年、僕は四つの大学山岳部の死亡事故の報を聞いた。僕自身も学部生時代、三年間のリーダー在任中、二つのきわどい事故を引き起こした。そこで、自分の経験をもとに昨年の事故を振り返りかえり、大学山岳部が抱える問題について指摘し、現役部員OBに考える材料を提示したい。

東京周辺の大学山岳部の人数はざっと現在百人くらいだろう。四年で入れ替わるとして延べ二百人。そして僕が知っているだけで、四年間で亡くなった面識のある山岳部員の数は十人。死亡率五パーセント、山岳部員の二十人に一人は山で死ぬ。僕にとつてこの経験は、何よりつらいものであった。だから、この不十分な小論が、今後の事故防止に何らかの役に立つことがあれば幸いである。

■事故の背景に関して

最初に僕は、アルピニズムを追求する団体としての大学山岳部の役割は、とつきの昔に終わったと思っている。その中で、昨年の統廃する事故を振り返るとき、ざっとあげるだけでも、以下のような背景はなか

つただろうか。

少なすぎる部員。下級生の指導に少ない人数で当たらなければならぬ上級生のジレンマ。伝承されない技術。にもかかわらず少ない人数で水準を維持しようと負担が増えるばかりの現役部員。その結果、過剰な登山以外の負担への不満を抱えたまま辞めていく下級生。かといって、これを克服する何の手立てもない大学山岳部というブランド。その中で、目指すべきものを失って途方にくれる部員etc.。このようなことは、山に登りたいという気持ちがいっしょにしていれば問題であると感じることはないかもしれない。しかし、それにしても最初からそういう気持ちで入ってくる新人生は少ないし、それをしっかりとリーダーに育てるシステムも、もはやなかなか成り立ちがたい。山以外の部分での問題があまりにも大きすぎる気がする。

運営はすべて現役任せの一橋山岳部に特有の問題と考えるとところが大きく、当時、JAC学生部に入入りし始めた頃でもあり、他の大学山岳部の組織と比べて、その感はより大きくなった。そこで、僕は他大学並の組織を整えるために、学生担当幹事との合宿についての協議、合同合宿、山岳部の体育会への復帰を通じて、クラブ活動としての山岳部の色彩を強めることにした。

しかし、このような措置によって依然として部員不足やそれに伴う問題は解消されず、二年後、僕は再び事故を起こしてしまった。そこで感じたことは、自らが事故を繰り返したのには構造的な背景があり、それは、現在のところかなりの大学山岳部に当てはまり、しかも当面改善される見込みもない、ということである。

一般に、組織に属している人間が事故を起こした場合、組織内で再発防止の反省と対策が練られることは山においても変わらない。それを繰り返していく中で、組織は改善される。事故を消化しようとする場合、その反省等が適切になされるかどうかは、組織自体の性質、その構成員の能力にかかっていると僕は考える。しかし、個人が組織に依存しているほど、また、組織がそれを自覚していればいるほど、その原因の

追及についての組織の態度は保守的になる。名指しして、個人に責任を帰すことは簡単だし、個々の状況分析についても組織は適切にできるかもしれない。しかし、組織が悪いということは、その組織に属している人間は認めにくいことではないだろうか。なぜなら、その組織を構成し、運営してきたのは明確に自分たちであり、組織の責任にするということは、その関与の度合いによって自分も悪かった、と認めることだからである。

このことは組織の責任を極めてあまいにする。山に行くまでは事故防止のために組織的なサポート体制をOB会は組んでいる場合が多い。しかし、そのことを明確に意識しすぎるがために、事故が起こった場合、まるで腫れ物に触るかのようになり、OB会は大学や遺族への対応に神経質になる。心情的、社会的には当然だが、しかし、それを恐れるがために、現役部員の活動への過剰なまでの干渉という結果を生み出しやすい。他の大学の学生と山に行ったりした場合、事故が起こったかどうかという質問をよく僕はされたものである。しかし、極論すれば、事故が起こったとき適切な対応をする、としか言いようがなく、組織の役割があるならそのためのもので、自分の大学の学生だろうが、よその

大学の学生だろうが変わらない。

話を戻せば、以上から、組織内部における事故の反省に構造的な背景が指摘されることはそれほど多くはなく、それは、外部の人間、組織との接触によって、気付くことが多い。また、組織といっても、大学山岳部の場合、OB会とクラブは明確に違うということを認識すべきであろう。登っているのはOBではなく、現役なのである。そしてまた現役も、「昔とは違うし、OBが何もしてくれないから」という理由で、嘆くだけでなく、今できることに知恵を出しつつ、事故を起こさないよう山に登るべきであろう。

■展望——合同合宿も選択肢の一つ

最後に、そのためにどのような展望があるだろうか。僕はアルピニズムを追求する集団としての大学山岳部の役割は終わったと言った。しかし、実際に、山岳部に部員はいるのであり、彼らは彼らなりにまじめに山に取り組んでいる。OBの勝手な思い入れで山岳部に見切りをつけてはならない。また、一年に一人いるかないかであつてもまだ、大学山岳部の需要はあると思う。現役は自分の山登りをより充実したものにするためにどうするか、という視点から考えたほうがよく、組織維持や伝統というものをあまりに意識しすぎ

ると、自分がなんのために登っているのかわからなくなってしまうが、それだ。それに、ここ数年大学山岳部の小人数化は定着しているの、若手OBに現役の指導を期待すること自体もそろそろ破綻寸前である。だったら、OBに過剰な期待をするのは止めたほうがよい。しかし、僕自身は少なくとも、山に真剣に取り組むことの大切さ(山に対する姿勢と言いかけてもよい)、そのために、自分がいかに山を知らなかったかを自覚すること、そしてそれを自覚した上で、その山を舞台にした無限の可能性、といったものは山岳部のよき伝統として伝えていくべきものであると思っている。それを自覚した人間であるならば、事故が起こってもしょうがないと思っているし、その前提の下で、レベルを下げるという安易な方法に逃げることなく、どうしたら事故が起こらないか模索しつづけることもできるであろう。

しかし、実際のところ、僕は学生部でパートナーを得ることができなければ、クライミングを続けることはできなかったし、合同合宿という形で、自分の経験を拡充し、後輩の指導をある程度補うことができた。実際は、大学山岳部をもちや一大学だけのものにとどめず、テニサークルのようにインカレ化するのも一つの手だと思っている。また、合同

合宿をより慣例化してもよい。海外登山であれば集まる人間が、国内では集まらないという道理もない。そうすれば、その練習のためにいっしょに行く他大学の後輩の面倒を見てやろうという気にもなる。

大学やOB会の監督を受けている多くの大学山岳部にとって、このような構想が難しいことは事実である。しかし、これまでのやり方が多くの大学で行き詰まりを見せているのも事実であり、そして、僕は悲観的なから、この行き詰まりは今のままで

して、自分の行動に責任を持つという自覚であり、自己責任をより明確に自覚することと言い換えてもよい。それは、個人的には、僕が一橋大学山岳部で身につけたよき伝統であり、OBとなった今も後輩に伝えていきたいもう一つのことである。

*

最後に、今年度から、短波ラジオの高層気象の放送が経費の関係で打ち切りになった。今年末年始の遭難の多くが、気象への対応の不備によるものであった点を考えるとき、ぜひともラジオ放送の復活を望むし、できれば日本山岳会にその一翼を担っていただきたいと切望している。

6,000m以上の1,215峰を全て所収 世界初の精密登山地図 完成!!

宮森常雄 著 (ヒンズークシュ・カラコルム研究会)

カラコルム・ヒンズークシュ Mountaineering Maps of the KARAKORUM & HINDU-KUSH
by Tsuneo Miyamori
登山地図 B全判地図13葉

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究 (宮森常雄 雁部貞夫 共著)

A4変型判・上製美装ケース入 385ページ

特価30,000円(税別) (7月31日締切) 定価33,000円(税別)

国内外の多くの登山家・探検家による最新情報を刻み込んだ世界で最も詳しい登山地図がついに完成! 全て経緯度を位置付け、既登峰・未登峰を明示。氷河地帯の知りうる限りの情報も満載。別冊山岳研究では貴重なパノラマ写真に高度と山名を添えて掲載。現地言語による地名山名研究と併せてヒマラヤ全域の知識を提供する。

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel. 075-751-1211 Fax. 075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

新日本山岳誌の 編纂について

編集委員長 高木泰夫

一九九九年五月に第一回編集会議「山」第六五一号で報告)を開催して以来、今年五月の第三回会議までに、基本的な事項についてはすべて検討を終わることができた。

すなわち第一回会議では「山の選定基準の設定」、第二回会議では「執筆要綱の決定」、第三回会議では「山座配列の基準設定」をそれぞれ主たる議題としてきたので、その概要を申し述べることによって中間報告としたい。

■書名の決定

第一回会議以来、検討を重ねた結果、「新日本山岳誌」とすることにした。高頭式氏の大著『日本山嶽志』の編纂趣旨を受け継ぎ、さらにこれを発展させることを今回の編纂意図としているので、前著に近いが、これと明確に区別できる題名を選ぶこととした。「志」、「誌」のいずれも「書き記したもの」という意味があるが、今日では「地誌」「書誌」などと表記して「志」を用いているものが少なくなくなっている点をおもひばかつ

て「誌」とした。

以上は本委員会での原案で、最終的には理事会での検討を経て決定ということになる。

■山座選定状況について

第一回会議で、選んだ山座をA、B、Cの三ランクに分けることを決定し、これによって各支部で選定作業を進めた結果、以下のような各ランク別の山座数となった。
Aランクの山 二二四座
Bランクの山 六一一座
Cランクの山 一九七〇座
合計 二八〇五座

なお、現在検討中の部分もあり、最終的にはこれより若干増えることが予想される。

ちなみに国内の総山座数は約二万座前後であり、『日本山嶽志』に記載されている山座数は約二一四〇座である。

■山座の配列について

以上のような山座の選定および今後進められる執筆作業は、すべて支部単位すなわち行政区域別に行われてきたし、今後も行われるが、本書を完成する段階では、これを山系別に再分類し配列する作業がある。

したがってその前提には山系の区分作業がある。このことについて先著を探ってみると、意外なことに千差万別、人それぞれによって分類方

法が異なっていることに気づく。以上から今回は会員で、本書の山系概説を執筆していただくことになっている五百沢智也氏に、山系区分をお願いした。ここでは詳述することを避けるが、氏のつくられた地形区分図によって選ばれた山座を各山系ごとに東から西へ、北から南へを原則として配列することになっている。したがってこの作業は、支部を超えて行われることになるので、以下の編集委員に特別にお願いした。

北海道地区(高澤光雄氏)、東北地区(佐々木民秀氏、関東地区(大森久雄氏)、中部地区(高木泰夫)、近畿(岡山県をのぞく)および四国地区(柏木宏信氏)、中国および岡山県(小椋凱夫氏)、九州地区(大谷優氏)

■結語

昨年七月十七日、本会ルームにおいて大塚博美会長と中西健夫ナカニシヤ出版社長との間で出版契約が結ばれた。その中で二〇〇二年十二月三十一日までに完全原稿を出版社に引き渡すとしている。

したがって今後の一年半ばかりが本書作成の山場である。各支部ではそれぞれ編集委員を中心に作業が進められているが、たいへんな時間とエネルギーを傾注することになる。会員各位の一層のご支援とご鞭撻を願いたい。

追悼
初代秩父宮記念山岳賞審査委員長
小田稔会員逝く



竹内哲夫

小田稔会員(会員番号八九七二)は、平成十三年三月一日逝去され、三月五日聖イグナチオ教会で葬儀が行われた。会員多数がこの葬儀に参加した。昨年の年次晩餐会では元氣なお姿を拝見したばかりで、突然の訃報に驚いた人が多い。

小田さんは創設されたばかりの秩父宮記念山岳賞の初代委員長として、東京情報大学学長などご多忙の中、二年間にわたり毎回委員会に出席し、見事な手綱さばきで、錚々たる審査委員会メンバーの意見にじつくりと耳を傾けつつ、取りまとめなければならぬ期日までの予定スケジュールに合わせ、委員会を極めて巧に、しかも皆が納得する進め方でリードされた。

創設されたばかりで、規定そのものにも不足不備な点がなくはなかつ

たが、注目の集まる中で第一回秩父宮記念山岳賞の候補として二件の業績を選び、その年の年次晩餐会の表彰にこぎつけることができた。その苦心の経過は、平成十一年一月号の会報「山」に掲載された。

小田さんは宇宙物理学の大家で、宇宙線、X線天文学の分野で数々の発明や発見で著名であり、多くの国際的な賞を受賞するほか、平成五年には文化勲章を授与されている。その一方で登山を愛好され、各地の山に登っておられ、知枝夫人（会員番号九〇九六）とともに、趣味の欄には常に真っ先に「登山」をあげられた。年次晩餐会には毎回お二人で出席されていたことは記憶に新しい。

小田さんはまたアメリカ、ヨーロッパの学会等の途次には、スイス、特にグリンデルワルトに立ち寄られた。横有恒さんのアイガー東山稜初登の際のガイドであったブラバンドさんやその孫娘のマルグリットさんとは極めて懇意な間柄である。横さんが登山者の利便とグリンデルワルトへの感謝の意をこめて、私財を投じて建てたアイガーのミッテルレギ・ヒュッテが老朽化したため、ヒュッテの建て替えと横さんを記念して、現在のヒュッテを山麓のグリンデルワルトに移設保存しようとの計画を昨年現地を訪れた際に知り、い

ち早くその情報を日本山岳会に寄せられたのであった。

小田さんは、旺盛な好奇心と夢のような発想の持ち主であるうえ、いかにも童顔で、そのにこやかな笑顔から、「星の王子さま」の愛称で呼ばれていたことは多くの人の知るところである。

小田さんが亡くなられたことは誠に残念である。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

ネパールの皇太子殿下来日 歓迎レセプションを開催

ネパール王国のディペンドラ皇太子殿下が来日され、四月二十八日午後七時より、日本山岳会主催の歓迎レセプションが東京・六本木、国際文化会館で開催された。大塚会長以下ヒマラヤ登山にゆかりの深い多くの会員、労山、日ネ協会会員、ネパール大使館、外務省、皇太子殿下ご学友など総勢七十六名が集い、ポカラ山岳博物館の基金援助に対するお礼なども述べられた。

翌二十九日からは大塚会長、西村常務理事などが随行して関西を訪問。京都ではネパール国大阪名誉領事・今西邦夫氏主催の夕食会や京都支部の歓迎会に出席、金閣寺、京都御所などを観光され、五月二日、関西空

港より帰国された。

その後六月一日、ネパール王室の夕食会の最中に、ビデンドラ国王夫妻をはじめ親族八人が銃撃事件により死亡、ディペンドラ殿下も六月四日、亡くなられた。

（村井 葵）

報告

6月

自然保護委員会

「高尾の森」植樹祭 二百六十人余が参加

度々紙面上でお知らせしてきた「高尾の森」植樹祭が、各方面のご協力を受け、高尾・小下沢地区において四月十五日賑々しく挙行された。

各メディア（事前に朝日・毎日・読売の各紙、十四・十五の両日にNHK二十一日放映）からの取材を受け、報道されていたこともあり、植樹祭当日の参加者は、実行委員会の予想を遙かに上回る二百六十名を超えるものとなった。

お客さまとして、関東森林管理局東京分局計画部長青木正篤氏、東京神奈川森林管理署署長横井茂氏、青森支部から（白神山地ブナ林再生事業実行委員長）村田孝嗣氏、関西支

部から（ブナを植える会）会長）桑田結氏をお迎えした。村田、桑田の両氏には、前日十四日からのご参加をいただき、宿泊先高尾グリーンセンターにおいて、翌日の植樹祭最終打ち合わせの後、共に植樹活動の経験を持つ体験のお話をうかがうなど、懇親を深めた。

当山岳会からは神崎忠男会員、西村政晃会員をはじめ、多くの会員が参加した。さらに、会員外の一般参加者百八十一名、その他、林野庁・報道関係者の参加を得て、定刻の九時半には、小下沢キャンプ場跡地はカラフルな人の群で埋められた。お客さまからの挨拶をいただいた後、苗木の植え方のデモンストレーションがあり、小班に編成された参加者はリーダーに導かれて植林地へと向う。ゆっくり歩を進める高齢者。親に手を引かれる幼児。祖母の背になる幼子と参加者の幅も広い。

植樹を済ませた参加者には、出発地で温かい豚汁が供され、一汗かいた後の豚汁はことのほか好評であった。

多くの方々のご協力、ご尽力の下に動き出したこの活動に、私たちは改めて大きな責任と義務を強く感じたことであった。会員各位のさらなる継続的なご支援を切望してやまない。

（西村智磨子）

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
リポートします。

北海道支部 全国にJAC 自然児学校の開設を



炊事ができる対岸までわらじで徒渉

近年、若者たちの登山離れが著しく、山で出会うのは中高年ばかり、大学山岳部は部員募集に頭を抱えている……等々の話はあちこちで聞かれる現状である。

一昨年九月、栗駒山で開催された本会の自然保護全国集会でも、こうした問題に議論が沸騰。その中でわが北海道支部の吉村啓一自然保護委員の「若い人たちに山や自然を知ってもらうために、ボランティアとして小中学生を山に連れてゆき、自然保護のあり方を教えたい」との発言内容が、自然保護委員会の機関紙「木の目・草の芽」の第三十九号に掲載されたことから、北海道支部でもそのことに関する討議がなされ、自然児学校事業が昨年度より実行される運びになったのである。

子供たちに自然の大切さを教えることは、ただ教室や教科書で頭から押し付けるのではなく、大自然の中に子供たちを放りだして、自然に親しみ、自然を友にすることから始めなければならない、という認識が一致して、JAC北海道自然児学校の創設と相成ったわけである。

では各論をどうするのか。言うは易く行は難しであったが、幸いにも、一昔前私が主宰していた牧場で自然児学校を数年間開設したことがあり、その節のノウハウや経験を買

われて、私とその担当の任を仰せつかることとなった。初代校長は元本会理事や本支部第二代支部長を歴任された伊藤秀五郎先生にお願いし、当時喉頭がんの徴候発症にもかかわらず快諾を得て、大成功裡に終えることが出来た。

開校の挨拶で「米国の学者の説に、幼少時に大自然の中に浸り、自然の美しさをその肌に刷り込むことは、長じて自然への憧憬を募らせ、美しいものを見て美しいと感動する心を育てることには大いなる意義を感じ、自分もそのような行動を果たしたいと念ずるようになる……」と述べられたことが今も鮮明に脳裏に残っている。

北海道自然児学校は全くのNPOであり、会員の奉仕活動によって成り立つ。しかも、フィールドに日高山系新冠川上流を選んだことから、地元新冠山岳会（代表松本健氏、本会会員）の有志による涙ぐましい熱い支援によって念願は達成された。

ここで提唱したいことは、このような意義ある事業を一北海道支部の事業に止めず、本会の事業として広く各支部に勧奨するように関係各位に切望するものであります。

（副支部長・向井成司）

*本年度の自然児学校開設要項、および日程は二三ページに記載。

宮崎支部

『みやざき百山』が 宮口出版文化賞に輝く

『みやざき百山』（日本山岳会宮崎支部編著）が、平成二十二年宮口出版文化賞（宮崎日日新聞社）授賞決定の連絡を受けた日の喜びと感動は筆舌に尽くしがたいものがあつた（授賞式・平成十三年三月十五日）。

宮崎支部は昭和六十年七月、全国二十番目の支部として誕生した。その契機となつたのは、戦後、宮崎県の最南端・都井岬で野生馬を、さらに幸島で野生サルの研究で世界で初めて動物の社会形成を提唱され、個体識別の動物社会学の理論を打ち立てた京都大学の今西錦司氏（元日本山岳会会長の檄によるものであつた）。

支部結成の三大目標の一つが『みやざき百山』の刊行であつた。黒豹の大谷優支部長を中核として調査・執筆の作業に着手した。県内の祖母傾・九州山脈脊梁・県央・霧島・南那珂の五山系に区分して三百山を選考、検討を重ねて百六十山をピックアップし、实地踏査、検討、バリエーションルートの開拓を行って百十山に絞り込むとき、歳月は十星霜を重ねていた。

大谷支部長は、山々にちなむ神話・伝説・文化遺産・民俗・祭り・動植物



『みやざき百山』の表紙

物をはじめ、地質・自然の造形・風情などを加味した山の魅力のエッセイ風にまとめた」と主張して譲らなかった。

■デイスカバーふるさと

執筆が十山に達するころから大谷支部長の健筆は冴えに冴えてきた。ふるさとの山を讃歌し、豊かな自然を見直す素材を県民に提供するため、平成十年九月から毎週木曜日の二日間、宮崎日日新聞の一ページを割愛してもらい『みやざき百山』を発売することによって、県民の批判と評価にさらした。

着手から十五年、新聞発表によってデイスカパーふるさとへの県民の関心を高め、「文章に無駄がなく読む人をひきつける、一緒に登っている錯覚すら起こる、写真の素晴らしさに感動する」などなどの評価が新聞投書に相次いだ。

大谷支部長はあとがきにこう述懐している。「二十世紀に山に登った者として、自然環境の見たままの現実

を二十一世紀に生きる人たちへ語り継ぐメッセージになればとの思いを込めて書き綴った」と。共に汗を流した岳人の一人として、大谷支部長の真摯な血と汗の結晶に大きな拍手を送りたい。

「地球は生きとし生けるものの母体で、決して無尽蔵ではない。この地球を浪費することがないように(日本山岳会制定の自然保護憲章の抜粋)、節度ある利用に努めたい」と考えている。

今日もまた、山を愛する旅人として、心の鐘を打ち鳴らしつつ山行を続けたい。
(井野元繁)

秋田支部

平成十二年定期総会 佐々木民秀新支部長を選出

秋田支部の平成十二年定期総会が十三年四月十四日(土)午後四時から市内のレストランで開催された。

冒頭、岡田支部長から昨年の支部活動に対する謝辞と今後の運営に対しての協力要請があり、早速、議事に入った。

昨年度の事業報告は、支部山行の結果を中心に行われ、特に韓国の仲間と登った漢拏山や俗離山山行については、終了後の懇親会で話題を独占した。タツ年にちなんでの記念山

行も二つほど行い、親睦を深めた。

残念ながら、全国支部懇談会東九州大会や全国自然保護集会福井大会には参加できなかったが、来年度以降、一人でも多くの会員が参加できるように環境作りが必要との声があった。

次いで提案された平成十三年度の事業計画案は、①県内の山域の中から、新しいルートの踏査 ②俗にいわれる「秋田三葉師」詣で ③来秋行う韓国山岳会慶南道支部の一行との鳥海山登山 ④台湾、韓国への友好登山の継続実施 ⑤高齢会員のための「足腰強化」「元気回復」につながる旧峠道や旧街道の散策も視野に

入れたコースの設定など盛りだくさんの内容である。

いずれも原案通り承認された。任期満了に伴う役員の改選は、選考委員会を設置して協議の結果、

佐々木民秀・現副支部長を新支部長に選出し、副支部長には佐藤昭義会員、委員には鈴木裕子会員を新たに任命、ほかは全員留任とする委員会の選考結果を全員一致で承認した。三年後には設立四十五周年を迎えることを念頭に、一層の組織の充実を図ることを誓い合い、総会を終了した。

会員総数七十三名。出席会員二十六名、委任状二十八名。(鈴木要三)

日本山岳会機関誌『山岳』創刊100年記念

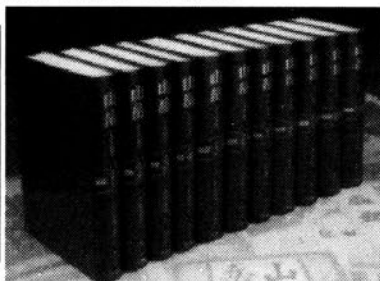
復刻 山岳 戦前号 第1期

2005年から2006年にかけて、日本山岳会は創立100年を、『山岳』も創刊100年を迎えようとしています。その偉大な足跡を祝して『山岳』戦前号(全101号)を復刻刊行いたします。

今回刊行の第1期は、日本登山史の形成期を鏡のように映しており、登行記をはじめ、すべての論稿が詩情あふれる山岳文化の結晶として輝いています。

- 第1期：全11巻
第1年～第11年
- 収録年
1906(明治39)年
～1916(大正5)年
- 総頁
7800ページ
- 仕様
菊判、上製、
貼箱入

●カタログを用意しております。下記へご請求下さい。



第1期定価：138,000円(税別)
*分割払い、ボーナス払いもできます。

アテネ書房

東京都文京区本郷1-1-1 (〒113-0033)
TEL03-3816-3871 FAX03-3816-3873
E-mail: info@ateneshobo.co.jp

海外の山

21世紀初の
エヴェレストで
起きたこと

江本嘉伸

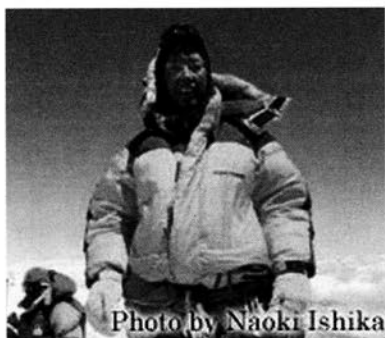


Photo by Naoki Ishika

チョモランマ山頂に立つ石川直樹
(石川のホームページから)

六月二日朝、ヒマラヤの王国から衝撃的なニュースが飛びこんだ。

ネパールのビレンドラ国王夫妻が宮殿内で暗殺された、というのである。四月来日したばかりのデイペンドラ皇太子の銃乱射というが、詳しい経緯は不明だ。

そういう政情不安とは無縁に、二十一世紀最初のエヴェレストでは、新時代を象徴する多彩な登山風景が展開した。

天候が安定せず、世界最高峰へのアタックは、五月下旬、とりわけ二十三日に集中した。

二十二日、頂上からハンググライダーが飛び立った。フランスのベルトラン・ロシュ。九〇年十月七日に父、ジャン・ノエル・ロシュとともにネパール側からの公募登山隊に参加、エヴェレストに登頂したあと、帰路サウスコルからパラグライダーでタンデム飛行してベースキャンプに降り立った。当時十七歳だったベルトランが今回はハンググライダーの世界チャンピオンでもある妻とともにチベット側からアタック、二度目の登頂を果たし、頂上飛行をやつてのけたのである。

「南米大陸初の女性隊」を掲げたチリ隊は、この日八時過ぎ、ネパール側から三人の女性が登頂した。

二十三日には、やはりフランスの十二歳のエクストリーム・ボーダー、マルコ・シフレディがスノーボードでの頂上滑降に挑んだ。チョーオユードヒマラヤの高峰からボード滑降しているマルコは、この日午前六時チベット側から登頂、北壁のノートン・クロワールにルートをとつたが、二〇〇メートル下りたところで、寒さでビンディングが破損、シェルパの助けで締め直し、結局二時間半で六四〇〇メートルのABCまでの滑降に成功した。昨年十月にはスロベニアの登山家であり、エクストリームスキーヤー、ダボ・カルニツアルがエヴェレスト山頂からスキー滑降を果たしたが、マルコはそ

れに次いで冒険の記録を樹立したことになる。ただし、前日オーストリア人がボード滑降にトライした、との情報もある。

マルコはラッセル・ブライスをリーダーとする国際公募隊のメンバー。そのラッセル隊のひとり、日本山岳会の会員でもある東京の早大生、石川直樹(23)もこの日、見事に登頂し、オーストラリア大陸最高峰のコジアスコ(つまりカルステンツ・ピラミッドではなく)を含めたセブン・サミッツ史上最年少登頂記録をつくった。石川は北磁極から南極点まで世界各国七人の青年たちと人力移動した「Seven to the South」(山・四月号参照)を終えた直後、ビンソンマシフ、アコンカグア、コジアスコと三大陸の最高峰に登り、一気にエヴェレストを目指していた。

登山として、セブンサミッツは、もはや大きな価値があるとは、言えないだろう。そういうことは別に、石川直樹の行動の新しさは、山登りも旅も常に「表現者」として徹しようとしていることだ。しかも、高所からも極地からもモバイル型パソコンで東京に詳しい日記を送り、自分のウェブサイトに発表している。その文章がいい。芥川賞作家であつた祖父石川淳の血を、海や山や平原で行動しながら別なかたちで活かしている、という感がある。最年少といえは、昨年十四歳でエヴ

エレストに挑戦、南峰まで達しながら涙をのんだネパール少年、テンバ・ツエリン(15)が、同じ二十三日、南側から登頂に成功した。

ツエリンは、昨年の挑戦で凍傷にかり、五本の指をなくしている。

地元ネパールの人々のさまざまなチャレンジは、この十年、際立ってきている。同じこの日、チベット側からはネパール女性のラクパ・アカ・シェルパが登頂し、ネパール女性として初の二度登頂者となった。四月、惜しくも六四〇〇メートルのABC付近でクレヴァスに落ちて死んだバブ・チリ・シエルパといい、長くいわゆる先進諸国の山好きたちの憩いの場となつていたヒマラヤの王国が、自国の民の活躍の場ともなったのは、素晴らしいことだ。

二十五日には、盲目の登山家、エリック・ワイヘンマイヤーが、登頂を果たし、障害者の登山に新たな地平を切り開いた。前後を経験豊かな登山家によつてザイルで確保されているとはいえ、目がまったく見えない人間がアイスフォールを梯子で越え、ロツツェ・フェースを攀じ、ヒラリー・ステップの登下降にもひるまなかつたのだ。これは、信じられないことである。

遭難は、バブ・チリ・シエルパのほか、オーストラリア人、ロシア人など三人。そこに国王暗殺の悲報である。世の中、何が起きるかわからない。



ダルシヤン氏 (前列中央) を囲んで

「マナスル」にこの人あり ローク・ダルシヤン氏

村山雅美

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度をお願いします)



イラスト・宇都木慎一

一九五二年初頭、西堀さんが巧妙な手口で戦後初のネパール入りをした。これはクリシュナ・バハドール・ヴェルマ氏の奔走によることは周知のことだ。

ところが治安上、旅行も容易でない地域にマナスルがあった。しかも登山の申し込みがフランス、ニュージーランドから出ていることを知った。正常な国交関係をまだ持たない日本が割り込むことなど、とても手におえない仕事、深入りは禁物とのクリシュナ氏の判断は正解だった。彼の父は侍従武官、スポーツを通じての友人でもある皇太子の特別秘書官ローク・ダルシヤン氏に頼み込んだ。稀有な彼の出自、若くしてその身をおいた波瀾の人生、あるときは動乱の渦中にあった事実を知る七つ年上のクリシュナ氏なればこそだった。

私が思うには、「よく気がついた」「俺に任せろ」と慎重なダルシヤン氏が腰をあげたのは彼の見識によることと見た。こと日本にかかわるとなると、かねてより身辺に関係も深かった王政復古と明治維新、ネパール王室と日本皇室、トリブバン王と明治天皇、日本の欽定憲法と新憲法など交錯する日ネの近似点から祖国の立憲君主制の中核にあつて受け継いだ彼の血が騒いだのだろう。

ローク・ダルシヤン・バイラチャル氏は一九三二年二月十二日、カトマンズで王家とは五代にわたる由緒ある家系に生まれた。曾祖父、曾祖父は王室の司教者、祖父から長兄まではインド医学の御典医として使えた王家に極めて近い関係にあつたことから、わずか八歳にして守役として宮仕えが始まった。彼の家系では唯一の宮内行政官の道を歩んだという。

一九四七年、インドの独立を契機に激化した反ラナ運動の青年はトリブバン国王を擁立するM・P・コイララ、ガネッシュマンシン、プラサド・アバダヤ氏などと、王制復古を唱える志士の一人として討幕運動の修羅場を弱冠十五歳にして踏み、マナスル登山許可に向けての人脈はここに生まれた。

一九五〇年十一月、インド・アラ

バド大学に留学中のダルシヤン氏はトリブバン王家のインド亡命に伴い、デリーのハドラバードに身を寄せた王家一切の御用にあたれとの電報を受け、王家御用係を拝命した。一方、国王不在のネパールでは、M・P・コイララ氏が国王を元首とする民主政府を要望するネパール会議派の長となり、国王を支持するインドの仲介で、王家・ラナ政権・ネパール会議派の三者間で王制の存続が確認された。一九五一年二月、王政復古となり、王家とともに帰国するやトリブバン王の報道官兼マヘンドラ皇太子の特別秘書官となり、以後四年間勤めることになる。就任後丸一年、

北アルプス白馬連峰

ゆっくりとした登山をお楽しみください。

素泊り、山行中の継続
駐車もできます。最寄駅、
登山口など、送迎します。

スケッチ、写真撮影など
四季折々の白馬の名所
をご案内いたします。

宿泊料金(1泊2食):
9500円

格安コース: 7500円より

和牛料理の宿

⊕ ひまわり

長野県北安曇郡白馬村神城22114-17
TEL (0261) 75-2292(代)
FAX (0261) 75-3284



JACの感謝状

強力な人脈と権力の壺を押さえた弱冠二十歳のエリート官僚ダルシャン氏を味方にした日本隊は幸運だった。

フランス、ニュージーランドの動きもあり、失敗を許せない日本隊に、一発勝負のトップダウン方式に賭けた。当時すべての外事は外務省の所管で、M・P・コイララ首相が外務・内務・厚生大臣を兼務、ブラサド・アバダヤ法務・報道担当大臣などいずれもご維新の同志。まずは日本隊の計画を吹き込まれたM・P・コイララ氏と西堀さんの会談で脈ありと見たダルシャン氏は、直ちにトリブバン国王との拜謁を設定した。これがフランス、ニュージーランド追い落としの決め手になったと彼は言い、引き続いてのブラサド・アバダヤ大臣との会談では、秋の偵察隊、五三年の本隊の規模（具体的内容）にまでおよび、マナスルはこうしてわれわれの手中のものとなったのである。

二〇〇一年四月十二日、日本山岳会はダルシャン氏に遅まきながら感謝状を差し上げ、当時の仲間とのお

礼の集まりにあたり、獅子奮迅の活躍の由来となる秘話を紹介させていだいたわけである。

*ダルシャン氏の経歴等については彼と丹部節雄会員とのファックス連絡に基き、ネパールの政情は朝日小事典「ヒマラヤ」を参考にしました。

ラリグラスの植林五年

大森弘一郎

ラリグラス（ロードデンドロン・アイボリウム／石楠花）の植林をネパールで始めてから五年が経ちました。成長に数十年かかる樹木のことを考えるには少し短気のような気がしますが、このプロジェクトの経過を検証してみたいと思います。

ラリグラスの切り株を見つけてその年輪を調べたことがあります、順調に育っている年の一年分の幅が約三ミリ、一年の成長が一節（約一〇センチ）とすると、三年で根本の径が一八ミリ、高さ三〇センチというのが単純計算の答です。

種の採取から始めて、現在これぐらいになっていれば大成功のはずですが。現状は大体そのように進んでいるのですが、なんとなく私も含めて大樹に成長した樹木を見たときの記

憶が強く、成長速度への期待が大きかっただけに、未だこんなに小さいの？ という感じになったり、樹の蔭に植えているため、初めてここにこられた方には見つからなかったりで、失望する側面もあるようです。

経験して解ったことですが、植林というのは数力月の遠征のような訳には行かないのです。その成果は数十年して現れます。従って評価は、その数十年に至る経過をどうフォローしているかの内容を見るべきとなります。

企業が行う植林では、十五年ぐらいで利用できる成長の早いユーカリなどが使われますが、成長の早いことは土地の消耗が早いという負の側面があります。ラリグラスは経済性で考えるととても他の樹種におよびもつかないことは初めから解っていましたが、日本山岳会のタイトルで行う植林として樹を選べば、当然白い峰の近景に浮かぶラリグラスとなります。ラリグラスはネパール人を勇気づけるネパールの国花でもあります。

このプロジェクトの目的は植林そのものと、とても私たちでは出来ないネパールの広大な植林可能地に、ネパール人自身によって植えてもらおうという植林啓蒙の二つがあります。もちろんわれわれの力の拡大

も。

選択した植林地がシバブリへの登山道の脇であり、高度二〇〇〇〜二三〇〇メートル、ラリグラス生育高度の下限近くです。よく霧がかかることも好ましく思えました。ナギグンパというモノストリーからよく見える斜面であるということも、その目的には適っていたと思います。登山道の脇には、ネパール語で「樹を植えて豊かな国にしましょう」—— Japanese Alpine Club」と書かれた看板が十カ所ほど立っています。ただ「植林は金になる」とはまだ思われていないでしょう。

植林を始めてみて、その困難さは当初の想像をはるかに越えています。最大の理由は、ラリグラスをネパールの山へ植林した経験者が世の中にいなかったということにありました。日本でも各国でも、品種改良された西洋石楠花の栽培は盛んで、発芽・育苗・生育の経験と技術は豊富です。しかしそれは、土壌、水、温度、湿度、肥料と条件を自由にコントロールできる環境の中での経験です。また水分条件のよい日本での経験です。これらを学んで臨んだネパールは条件が余りにも異なり、原理の解釈を除けば、実作業にはあまり役に立たず、現場での全く新しい経験の積み上げを専門の池田明彦氏

や大石勝彦氏と共に行いました。
一九九六年三月に種子の採取をして、屋久島の上屋久町立総合自然公園育苗棟の大山勇作氏に発芽育苗を依頼しました。またこの年五月よりは地球環境基金の助成を得て、植林地を決めて現地の植林を始めました。当初は山採りの苗とラリグラス以外の地元にあった樹の苗を使った混植です。九八年には屋久島で約五千本の苗ができて里帰りを果たし、二〇〇〇年には大船フラワーセンターの



石楠花の苗 (名札は里親名)



植林地 (上の文字は植林者の名前)

発芽にも成功するようになりました。初年度の植林地では、予想を越える乾季の影響を受けて惨敗しました。次の年は三〇〇メートル上部に発見した水源から水を引きましたが、そのホースが人害の盗難にあいました。啓蒙のつもりで目立つようにしたことが裏目に出てしまったのです。その後は人目につかない工夫した配管をして成功しています。さらに猪に根を掘られる、カミキリ虫にせつかく伸びた芽を片端から切られる、コガネ虫の幼虫に根をやられる、大雨でホースが破壊される等々、次々に難題がおきました(全て解決済み)。苗床では、粘土質の土壌を使って透水性のよい土を作るまでの試行錯誤がありました。山を掘ってきれいな表土を得ること、粉殻、粉殻の炭、ピートモス、川砂、遅効性肥料など。これらの混合は多すぎても少なすぎてもいけない。苗床の上流から水を取ってタイマー付きの散水装置を作りましたが、その散水の時間と量が難しい。

現在はこちらの殆どをクリアーしています。つまりJACは、世界で唯一ラリグラス植林の経験を保有していることになりました。昨年より、山の中の植林地で、水源より高い所で、乾季に植えた苗を次の雨季まで保たすことにも成功しました(この

原稿を書いている現在も問題なく生育しているとの報告あり)。

この乾季植樹の技術の成功で、山の見えるシーズンにカトマンズを訪れる方たちの楽しい記念植樹が可能になりました(どうぞ記念植樹をやってください)。

この五年間に使わせてもらった助成金は三回三年で約千万円、JACよりは約百万円、個人の協力と物品の販売で得た基金が約三百万円。これでできた植林の面積は約五ヘクタール(全体は一〇ヘクタール)。植えた苗は約五千本ですが、このうち最終的に大きく育ってくれるのは果たして何百本でしょうか。今後を上手に見守りたいと思います。

植林そのものの実態は以上の通りですが、啓蒙も大きな目標でした。植林に無償で参加してくれたネパール人は延べ約三百人、有償参加は延べ約五百人、この植林地を通じて看板を見てくれた人は推定ですが二千人、一人。しかしその啓蒙量を測る手立てはありません。

昨年のネパールの新聞二紙に、東部のラリグラス林保護の重要性を訴える記事が出ていました。私たちの影響があったのかどうか不明ですが、ネパール社会も動き始めています。啓蒙のもう一つの対象に日本人による植林がありました。外国に、ネ

パールに、植林してほしい。この成果については、これからの皆さまのお力が必要です。

樹種の選定について述べるなら、その場所に合った混植によつて密植することが理想です。いろいろの条件があり、なかなかできないことではあります。これからは誰もが未経験だった部分において、試行錯誤を通して得た経験を活かしてさらに広く効率のよい仕事をします。この経験を生かしてこそはじめて成果が上がったと言えるのかも知れません。

このプロジェクトは、当初自然保護委員会の活動にはなじまないというところで、日本山岳会全体のプロジ

総合カタログ(180P)完成! ご請求ください(無料)

憧れの海外の名峰登頂!

・6/3	富士山縦走	3日間
・6/9	キナバル山登頂	5日間
・7/7	カガ・フェアビュー山登頂	9日間
・7/7-8/7	大姑嶺山登頂	9日間
・8/17	真白山(白根山)登頂	7日間
・7/15-8/5	カムチャツカ・アバチ山登頂	8日間

★その他にも多数コースがございます

北海道・人気の2コース

・利尻山と礼文島花ハイク	4日間
6/15-6/20-6/22-6/29-7/6-7/15	9日間
・羅臼岳と斜里岳と雄阿寒岳	4日間
7/12-7/15-8/2-8/23-9/22	9日間

オリジナルプランOK
お見積もり・資料請求等、お気軽にお問合せ下さい。

アミューストラベル株式会社

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-22-2 新宿サンエービル B1

☎03(5325)1256 FAX03(5325)1258

大 阪	06(6456)3366	名古屋	052(588)5617
広島	082(502)2525	福岡	092(414)5566

エクトとして始めました。しかし今は「自然保護委員会」の管轄下で、JACの団体会員である「山の自然学クラブ」がフォローします。植えた樹の里親になっていただき、そのいただいた養育費で今後のプロジェクトを継続します。今までだいぶ里親になっていたとき、それぞれの樹にお名前の札をつけてあり、地形図上に位置の記入をしてあります。

シバプリというのはカトマンズの北にある約一万ヘクタールの広い野生生物保護区全体のことです、この中でどこで植林をやってもいいと言われています。今回行ったパニモハンという場所のほかにも適地はいくらでもあります。マリク、チットレは次のターゲットとして最適。そのためカトマンズのゴダワリにある国立の植物園と共同の苗作りを始めました。またカトマンズの南にあるハッティパンの北斜面(素晴らしく景色がよい)も適地です、ここはリゾートの庭師にも苗を預けてあり、うまく成長しています。

植林は長期の息長い作業です、それを支えるためにさらに少しずつでも植林地を拡大していくことが必要で、またこれは植林の目的に適っていることになりました。

このパニモハンでは二〇〇五年の日本山岳会百周年の時には花を咲か

せます。二〇〇五年には二〇メートルぐらいのラリグラスが全山を花で覆うはずです！

日本山岳会が山に登ることだけを対象にして世界の中で新しい行動を取ることは、難しい時代になってきたようです。山というキーワードを使って、地球環境にどう貢献するのかが問われる時代になりつつあると思います。従ってもし(地球環境に関して)日本山岳会は世界で何をしているか、と問われたときには、ネパールで樹を植えていると、胸を張って答えていたきたいと思っています。そのために作業を続けています。

ボリビア日記・3 アンデスの聖なる山 リカンカプールの登頂記

増山 茂

五月某日

ほぼ円形に近い月が、四〇度の傾斜で滑らかに落ちていくリカンカプールの稜線のすぐ上に輝き、その頂上にだけわずかにかかる薄い雲の背景光となっている。月明かりで見ても雪がうつすらと火山岩の斜面を埋めているのがわかる。昨日の雪のせいで、朝から降り始めた雪は強い西風を伴って一日中間断なく降り続い

た。寝袋に入ってもリカンカプールのから吹き下ろす風がレフシオ(山小屋)の屋根を鳴らす音をずっと聞いていたような気がする。で、起き出して満天の星を見るまでは半分諦めていたのだ。

さて、ここ四七〇〇メートル地点から登高開始である。目指すは標高差約一三〇〇メートル、アンデスの聖山リカンカプールの頂である。

アンデス山脈は大きく見ればどの地域をとってみても縦に走る二つの平行する山脈からなる。アマゾンからの湿った風を受け止める「東の山脈」と太平洋の砂漠地帯にのぞむ「西の山脈」である。ここボリビアではこの二つの山脈の間にアルティプラ

ーノと呼ばれる高原地帯が挟まれる。北から、チチカカ湖を含むティワナコ地域、ラパス上部のエルアルト、オルコ高原、ポトシ山地、ウユニ塩湖地帯、そしてその南、チリ、アルゼンチン国境と接するケチュア語でカラパンパ(カラは無、パンパは平原の意)と呼ばれるボリビア最南部の高所乾燥地帯。これらはすべて標高四〇〇〇メートルに達する高地にある。この最南深部では「東の山脈」は乾いた砂漠の中に点在するオアシスのような独立峰としてのみ存在しており、もう少し南下するとアタカマ砂漠に呑み込まれる運命にある。

リカンカプールの「西の山脈」の最南端、チリ国境に聳える独立火山峰、昔からのアンデスの聖なる山である。昨夜は、ラグナ・ブランカ(白い湖)湖畔にあるレフシオに泊まった。

ここはチリのサンペドロアタカマからボリビア南西部高原砂漠地帯に入り、ウユニへと抜ける玄関口である。標高四三〇〇メートル。登山者にはなじみが薄いかもしれないが、辺境旅行愛好者が四輪駆動車でこの秘境の地を駆ける基点(終点)となっている。もともと関野吉晴氏は人力で通り抜けたはずだが。宿泊者は私人、まだシーズンが浅いせいだろう。雪が降れば(実際降ったのだが)車は動きが取れなくなる。

この雪で大丈夫だろうかと小屋の者に問うと、ある者は雪が深いと滑るから止めておけというし、またある者はノープロブレマと答える。つまりはかれらも正確なところは何も知らない。雪が降り続けは取りやめだな、とちよつと弱気になって寝袋にくるまったのであった。

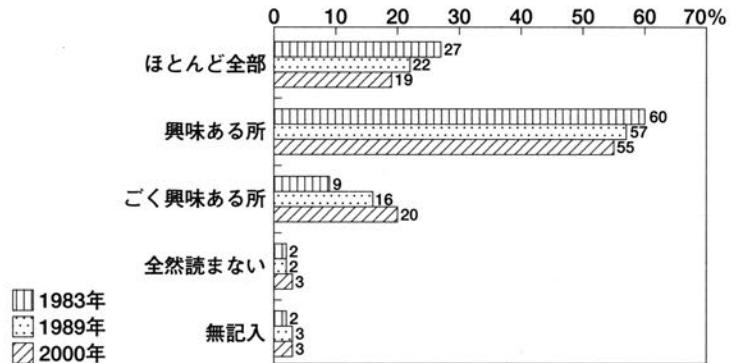
スタートの四七〇〇メートル地点はリカンカプールのゴリケス(五七〇〇メートル)との間のコルから約一〇〇メートルほど下になる。ここから北へ、白い湖から見ると正面に下りてくる丸まった尾根の基部に回り込む。約五〇〇メートル。ここ

第4回会員アンケート結果報告・3

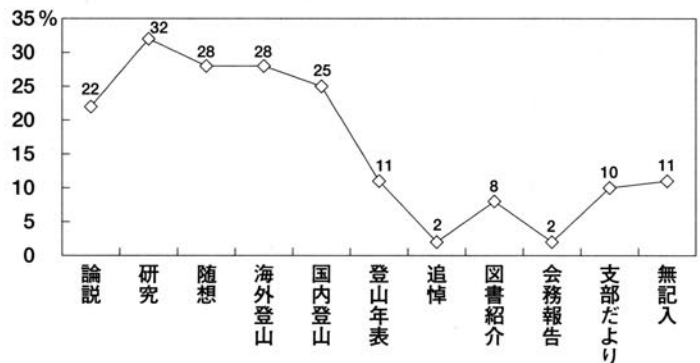
会員アンケート実行委員会

23. 年報『山岳』の利用状況 (読んでいる程度)

3回とも同じ傾向で、年報『山岳』はよく読まれている(「ほとんど全部」と「興味あるところ」で74%)。

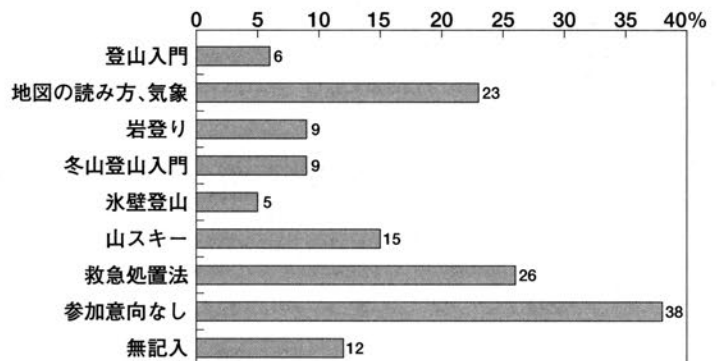


24. 年報『山岳』の充実希望記事



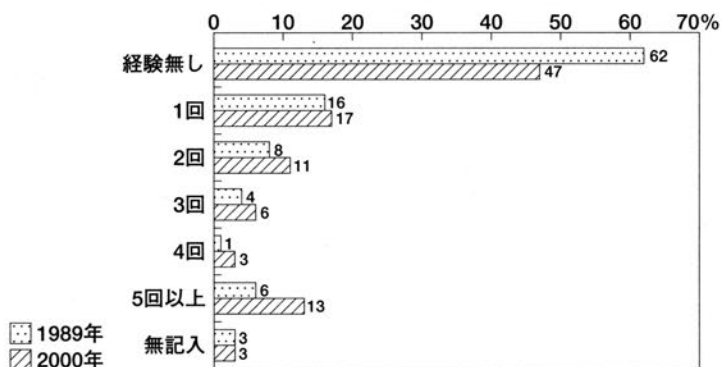
25. 登山講習会の希望

今回「登山救急処置法 (26%)」「地図の読み方、山の気象 (23%)」を設問に加えたが、いずれも希望者が多い。「参加意向なし」が38%というのは、オールラウンドな登山経験者が50%からすると無理もない数字といえよう。



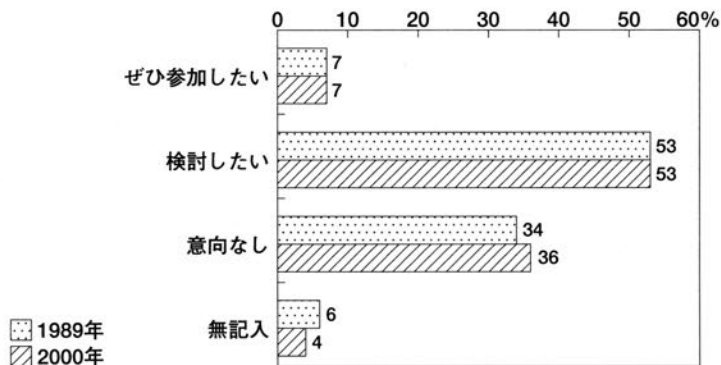
26. 海外トレッキングの経験

半数である50%の会員が海外トレッキングを経験している(前回35%)。5回以上の経験者が前回から倍増(6%→13%)しているのが注目される。



27. 海外トレッキングの参加意向

前回と同じく60%の会員が参加意向、検討意向を有する。前問で経験者が増加していることと合わせると、当会の事業立案に参照すべき会員のニーズの一つといえよう。



28. 海外トレッキングの希望地

ネパール(34%)がトップ。ブータン(20%)、ヨーロッパ(20%)がそれに次いでいる。「その他」は下記のとおりである。

問28 その他

ニュージーランド 53人

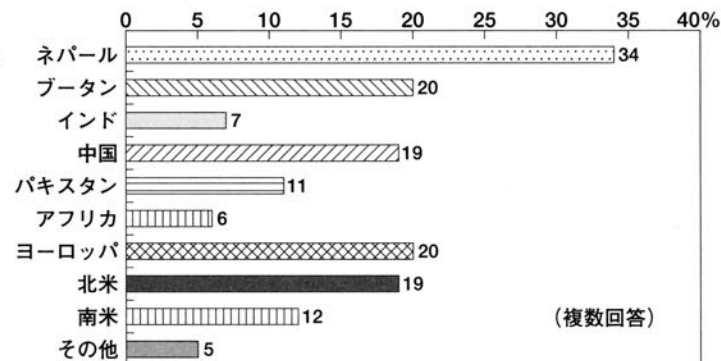
ロシア(樺太、カムチャッカ、北方領土を含む) 18人

オーストラリア 8人

モンゴル 8人

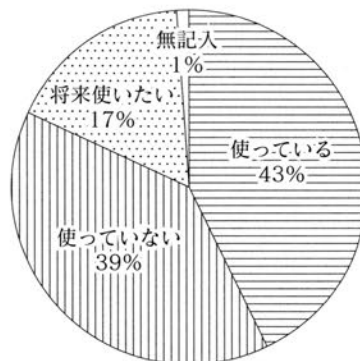
中央アジア 6人

その他(極地、チベット、インドネシアなど) 37人



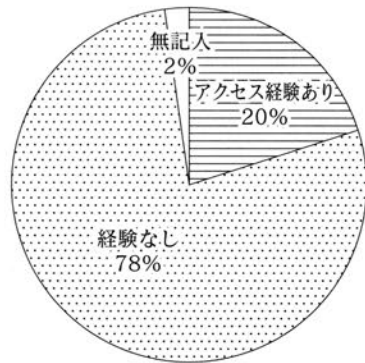
29. インターネットの利用

インターネットを利用している会員は43%である。これは当初予想されていたよりも、はるかに高い数値を示している。



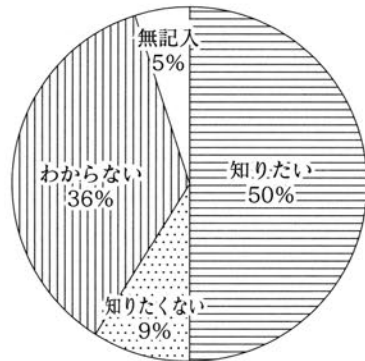
30. 当会ホームページへのアクセス経験

アクセスの経験のある会員20%で、前問のインターネット利用率43%を付き合わせると利用率はまだ低い。今後のPRとホームページの内容充実が望まれる。



31. 当会の情報をインターネットで知りたい

50%の会員がインターネットで情報を知りたいと答えている。質問29、30と付き合わせると、インターネットの活動に大きな可能性が見いだされよう。



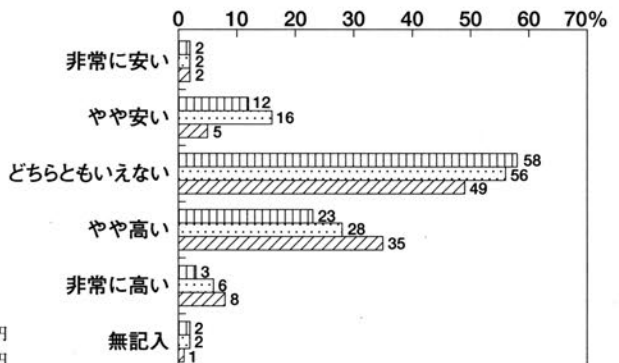
32. 年会費の評価

下記のとおり会費を値上げしていることもあって、前々回('83)、前回('89)に比べ「やや高い」「非常に高い」がやや高めとなっている。自明の理ではあるが、会をあげて会員へのベネフィット(こりやく)の不断の向上が必要なのと、この評価を時系列で把握してゆけば、会費改定のタイミングを決める目安のひとつとなろう。

1983年
 1989年
 2000年

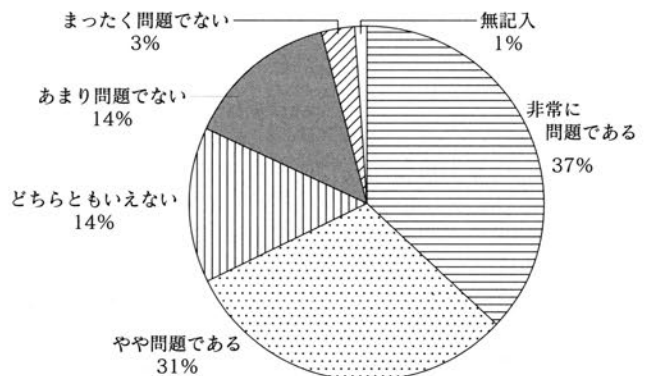
会費の推移

'83: 首都圏 8500円 '89: 首都圏 10000円 '00: 首都圏 12000円
 他地域 6500円 他地域 9000円 他地域 12000円



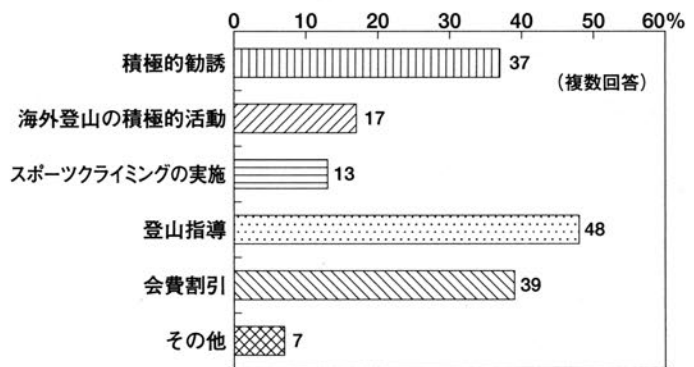
33. 若年会員が少数であることについて

「問題である」と考える会員が68%と多く、一方で「問題ない」と考える会員は17%である。



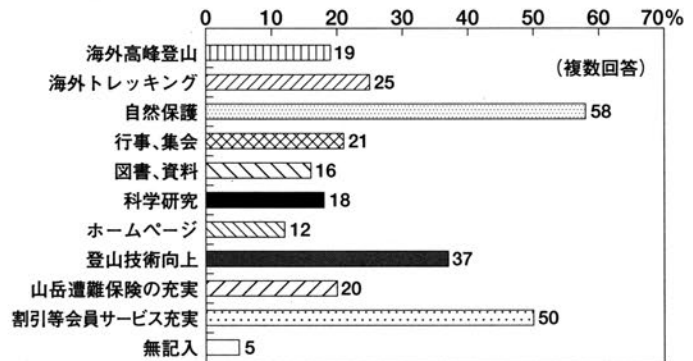
34. 若い会員を増やすための改善策

「小・中・高校生対象の登山指導」48%、
「若年会員の会費割引」39%、「積極的勧誘」
37%の三つの改善策の評価が高かった。



35. 強化、充実してほしい事業

前回 ('89) に続いて「自然保護」がトップ (58%)。「割引等会員サービスの充実」が次いでいる (50%)。当会の事業計画、収支予算策定に参照すべきデータであり、他のすべての質問の回答結果ともども有効活用が望まれる。



36. 自由回答

本設問は、意見、要望など自由に記入していただいたものであるが、単なる感想とか、連絡事項等を除いて、744件 (回答数の22.86%) の回答が寄せられた。その概要は次のとおりである。

●組織、運営に対する意見

会のあり方・コンセプト、会員資格・会員数、会費、組織、支部、役員、施設、インターネットのことなど多岐にわたった。

●事業に対する意見

会の事業のあり方、自然保護・環境、集会・行事、指導・講習、海外登山、トレッキング等に対する意見、要望が多数あった。

- ・「山岳」、「山」の内容、編集に関する意見・・・84件
- ・晩餐会の会費、形式などの意見・・・40件
- ・創立百周年記念事業に関する意見・・・32件
- ・本アンケートに関する意見・・・22件
- ・その他・・・33件

これらの貴重な意見、要望は別途報告書にまとめられた。理事会等にひろく会運営、改善の参考資料として活用されることになっている。

まとめ

本アンケートは54%という多数の会員の参画をいただきました。年齢構成など、母集団である全会員のデータとつき合わせて見ても、回答の偏りはあまり見られず、6,000名の全会員をはば“代表”していると言えます。

このアンケート結果から、会員構成や会員のニーズなど、様々な会の現状や課題を読み取ることができます。しかも過去のアンケート結果と比較することで、これからの当会の諸改善のための貴重な手がかりとして役立てることがで

きましよう。

今後、本アンケートの結果が、他のデータも加えて、当会の①中長期のビジョンづくり ②年度事業計画や収支予算作成 ③支部内あるいは会員相互のコミュニケーションなどに、広く活用されるよう希望しています。最後になりましたが、的確なディレクションをいただいた理事会の皆さま、設計・解析にご尽力いただいた会員アンケート実行委員会と総務委員会の皆さまに厚くお礼申し上げます。(文責・西村政晃)

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

羽根田 治・著
『生還』

登山には遭難の不安がつきまとう。厳冬の雪山やクライミング中の滑落だけではない。「あれっ、ルートをはずしたかな」とヒヤッとした体験は、誰でも一度や二度はあるに違いない。本書は、そうした「ごく普通の登山者」たち七人にインタビューし、遭難から生還までの体験をいねいに追っている。マヨネーズ二本で生還したと報じられた岩菅山の遭難も取り上げられており、十七日に及ぶ遭難の様子がリアルに描かれている。

遭難した場合、誰もが自力下山を試みる。そして冷静さを失い、行動

すればするほど窮地に追い込まれていく。ところが本書の遭難者たちに顕著なのは、ある時点で自力下山から救助へ気持ちを切り替えていることだ。そして、生存と救出に向けてあらゆる努力をしている。

確かに自力下山の努力は必要だし、生還には様々な要素が絡むだろうが、早い時期に万全の状態で救出を待つ態勢に入ることが生還につながると本書は指摘する。レスキューにまつわる著作が多い著者だけに説得力がある。

(三好まき子)

二〇〇〇年十一月 山と溪谷社発行
行 二五六ページ 千六百元

『BERG 2001』
Alpenvereinsjahrbuch Bd.125

ドイツ山岳会、オーストリア山岳会、それに北イタリアの旧オーストリア領で今もドイツ語の住民が多数を占める南チロール地方の山岳会の共同編集した年報の二〇〇一年版。新世紀を迎えて最初の号としての意気込みが、美しいカラー写真をふんだんに配した豪華な書物の全巻にみちがっている。

アルプスはどうに登りつくされ、ヒマラヤもすでに新味を失ったと思われてのことか、ペルーのコルディエラ・ブランカ山群の登山地図を付録として、南米大陸のこの地域の、

フリークライミングの試みを含めた記録が巻頭を飾っている。

三つの山岳会が国境を越えて一つの年報を発行すること自体、登山のナショナルリズムの偏狭さを時代遅れなものと感じさせずにいない。それに加えて、二十万とも三十万とも伝えられる多くの会員を持つ山岳会の裾野の広がりや考慮されている。アルプス地方の人間たちが山々とのように関わってきたか、山々を生活の場とし、文化を生む場とし、さらにはニーチェのような哲人の思想を生む場所ともなったことを語る文章がかなりの部分を占めている。冒険のロマンを誇らかに語る登山記録のたぐいは、むしろ少数派であって、山岳と人間のかかわり方をともに考え、ともに理解しようと語りかけるかのような編集方針が見てとれる。冒険と探検の登山から、山岳地帯の文化、山岳の自然と環境などの総合的な視野の広がりが目立つ。

多数の美しい図版を見るだけでさえ「山」の世界の多様さを味わい知ることができて十分に楽しい。でも、二六七ページの日本山岳会の名の入ったテントの写真が適切な使われ方であるのかどうか？ 企業化したエヴェレスト登山請負の生んだ悲劇をテーマとする書評の末尾にその写真があつて、「虚栄の煉獄？」というキ

ャプシオンが付されている。エヴェレスト・ベースキャンプで撮られた写真であるのだが、いささか筋違いな扱いようではないのだろうか？

(宮下啓三)

A4判変形 三三〇ページ

Harish Kapadia・編
『A Passage to Himalaya』

ヒマラヤン・ジャーナルに発表・掲載されたヒマラヤに関する紀行・論文等の著作七十編からなる選集で、ヒマラヤン・クラブが二十世紀末に際して特別記念号として発行したものの。編者は現在のヒマラヤン・ジャーナルの編集者であるハリシュ・カパディア (Harish Kapadia) 氏。ヒマラヤン・ジャーナルは、ヒマラヤン・クラブの機関誌(年報)で、一九二八年同クラブ創立以来、二〇〇〇年までに五十六号が刊行された。ヒマラヤに関する情報源として、貴重なものであることはよく知られている。第二次大戦後ヒマラヤが開放され、多くの登山隊がこの地域へ入るようになってから、この価値はさらに高まる。各国登山隊から登頂報告等多数が寄せられ、併せ発行されているニューズレターとともに、ヒマラヤ登山に関する唯一の公式記録といふべきものである。

ヒマラヤン・クラブは、かつて英

国人たちによってインド・デリーにおいて設立された。「ヒマラヤの旅行、探検を奨励し、援助し、ヒマラヤおよび隣接する山脈の知識を科学、芸術、文学、スポーツを通して広めること」という創立の目的は、現在も変わらない。

インド独立後、クラブはインドの人たちによって引き継がれ今日に至る。二十世紀末に際して、その使命は少なからず達成されたとし、ファンファーレなくして新世紀に入ることはできない、七十年余ヒマラヤン・ジャーナルに掲載された山岳文学の粋を選集として会員および関係者に進呈する、との趣旨の下に、本書が出版された。

著作の選択はチームにより行われ、でき上がったものは相応の選択である、もし、他に掲載されて然るべきものがある、といわれても救いようがないこと、と編者は言う。

礎、郷愁、探検、領域、先駆的遠征、登攀、ナンダデヴィ、徒歩旅行、遭難と救助、社会学と科学、物語、人、書評、追憶の部門からなる。

ヒマラヤの歴史と変遷を備えに見る思い。読み応えあり。書棚の手が届くところにおいて光る佳書。

(関口周也)

二〇〇一年 Oxford Univ Press
発行 三五一ページ

図書受入報告 (2001年4月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
後藤三男	安曇野紀行[後藤三男画集]:安曇野の四季と信州の山 他	104pp/31cm	信毎書籍出版センター	2001	著者寄贈
山口政一	山に憑かれて90年	278pp/20cm	山口政一(私家版)	2001	著者寄贈
錦織英夫(編)	チベット東南部ヒマラヤ偵察行(1999年9月13日~10月15日)	81pp/19cm	学習院山桜会	2000	発行者寄贈
メスナー(著) 横川文雄(訳)	ナンガ・パルバート単独行(Yama-kei Classics)	293pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
レビュファ(著) 近藤等(訳)	星と嵐:6つの北壁登山(Yama-kei Classics)	237pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
川崎精雄	雪山・蔵山(Yama-kei Classics)	325pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
松田宏也	ミニヤコンカ奇跡の生還(Yama-kei Classics)	253pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
植村直己	極北に駆ける(Yama-kei Classics)	261pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
奥山章	ザイルを結ぶとき(Yama-kei Classics)	373pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
平尾和雄	スルジェ:ネパールと日本で生きた女性	253pp/19cm	旅行人	2001	著者寄贈
石浦邦夫	安曇野に遊ぶ(写真集):その風土の中に	47pp/20cm	石浦邦夫(私家版)	2001	著者寄贈
石浦邦夫	私の安曇野(写真集):その豊かな自然	83pp/25cm	石浦邦夫(私家版)	2001	著者寄贈
静岡市山岳連盟(編)	静岡市の山山:静岡市山岳連盟創立50周年記念誌	290pp/19cm	静岡市山岳連盟	2001	発行者寄贈
慶佐次盛一	北摂の山:東部編[上巻]	270pp/20cm	ナカニシヤ出版	2001	出版社寄贈
河村正之	山書散策:埋もれた山の名著を発掘する	294pp/19cm	東京新聞出版局	2001	出版社寄贈
東海白樺山岳会(編)	東海白樺山岳会40:東海白樺山岳会40周年記念誌	113pp/26cm	東海白樺山岳会	2001	発行者寄贈
山寺仁太郎	甘利山	394pp/22cm	山梨日日新聞社	2001	著者寄贈
レルヒの会 他(編)	スキー発祥思い出アルバム	96pp/28cm	ベースボールマガジン社	1988	遠藤光男氏寄贈
佐野由美	バタンの空より:ネパール滞在日記	223pp/21cm	シーズ・プランニング	2001	勝山康雄氏寄贈
Club Alpin Suisse (ed.)	Istor-O-Nal Nord-Est : Exp. Neuchateloise au Pakistan 2000	64pp/24cm	Club Alpin Suisse	2001	発行者寄贈
A.Heim & A.Gansser	The Throne of the Gods	233pp/24cm	Macmillan	1939	山本健一郎氏寄贈

ルーム日誌

4月

2日 総務委員会

3日 アルパインスケッチクラブ 山げらの会

4日 フィルムビデオ委員会 アルパインスキー

クラブ

5日 アルパインフォトビデオクラブ 学生部

山岳地理クラブ

6日 学生部

9日 総務委員会 資料委員会 山岳編集委員会

アルパインスキークラブ

10日 常務理事会 二火会 アルパインスケッチ

クラブ

11日 理事会 会報編集委員会 ジャック93会

99同期会

12日 山の自然学研究会

14日 新日本山岳誌編集委員会

16日 フィルムビデオ委員会 新日本山岳誌編集

委員会

17日 評議員会 00同期会

18日 三水会 山研運営委員会

19日 科学委員会 インターネット小委員会 学

生部

20日 緑爽会

23日 図書委員会 資料委員会

24日 自然保護委員会 97同期会

25日 臨時理事会 アルパインスキークラブ

26日 臨時評議員会 青年部 98同期会

27日 山の自然学研究会

会務報告

四月理事会

日時 四月十一日(水)十八時三十分～
二十一時十分

場所 日本山岳学会議室

出席者 大塚会長、小倉、大森、
竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、宮
崎、高原、村井(菱)、宮下、河西、
松原、高遠、坂井、鰐坂、勝山、坂
本、増山各理事、神崎、中村各監事、
中川、平山、田邊各常任評議員

「委任」 平野、吉永各常任評議員

◎議事に先立ち、理事会議事録署名
人を森、宮崎各常務理事とすること
が決定された。

【審議事項】

一、平成十二年度事業報告・案(西
村)

別添資料により報告、一部記載事
項を修正、追加して決定。承認

二、平成十二年度収支報告・案(村
井龍)

別添資料により報告。承認

以上につき、神崎、中村両監事よ
り、四月十一日実施した監査結果に
つき、「いずれも正確かつ適正に処理
されている」との報告があった。ま
た、アルバータ・プロジェクト二〇
〇〇に対する別会計監査も適正であ

った旨の結果報告があった。

その他、次の3項目(①別会計監
査の充実 ②会長印の適正管理 ③
会員サービスの充実)についても指
摘があった。

三、「山岳競技による早池峰山高山植
物の被害についての報告とお願い」
提出について(河西)

平成十一年、岩手県で実施された
高校総体山岳競技の一つの会場とな
った早池峰山の高山植物被害状況に
ついての調査結果を踏まえ、日本山
岳会自然保護委員会名で、増田岩手
県知事及び合田岩手県教育委員会教
育長宛別添の書面により提出したい。
以上に対し、中谷岩手支部長と連
携をとることを条件に。承認

【報告事項】

一、評議員会報告(中川)

三月二十四日開催された評議員会
において、次期会長候補者の選定に
つき、投票の結果、平山善吉常任評
議員を推挙することが決まった(大
塚会長八票、平山常任評議員十六票。
以上に対し、現状のやりかた(現
行の定款「細則」を含め)について
の意見が数多く出された。

理事会として、会長は早急に評議
員会を招集し、次期会長候補者の調
整及び副会長、理事及び監事の候補
者推薦を行うことを確認した。また、
総会に向けての日程を考慮し、先月

予定した四月二十五日の「理事懇談
会」を「臨時理事会」に切り替え開
催する。

二、(株)山と溪谷社「ヤマケイ・クラ
シックス」(名著復刻)の販売協力に
ついて(西村)

(株)山と溪谷社より、山の名著とい
われる十四巻(モリス・エルゾー
グ「処女峰アンナプルナ」など別添
資料による)の販売につき、会員名
簿の使用依頼があり許可した。当会
員は、二割引、送料無料、代金後払
い等の特典があり、会員サービスに
なる。

三、富山テレビ放送制作協力(西村)
六月放送予定の「ナンタコット登

攀隊の軌跡」の制作会社ラックプロ
(株)より、資料等の協力依頼があり許
可した。なお、立大OBでもある鰐
坂理事に相談窓口を担当してもらう。

四、W・ウエストン師肖像写真の貸
与(西村)

中津川市観光協会より、恵那山登
山口に同氏の胸像を造り、「恵那山・
ウエストン公園」(仮称)に設置した
く、W・ウエストン師肖像写真を貸
与依頼があり許可した。

五、ディペンドラ・ネパール皇太子
殿下歓迎行事(西村)

外務省より協力依頼があった。同
皇太子は、四月二十五日より五月二
日まで日本に滞在、二十九日より京

新ハイキング選書

「第4巻」 一等三角点のすべて

改定第2版 多摩雪雄編 B6判・350頁・定価1995円(税込)
都道府県別に一等三角点を地図上に明示。一等三角
点の詳細な解説、一等三角点研究の決定版。

「第9巻」 一等三角点の名山100

第3刷 B6判・336頁・定価1632円(税込)
100山すべてコース図と写真入りで実用性が高い。

「第18巻」 一等三角点の名山と秘境

改定第2版 A5判・340頁・定価1837円(税込)
全国一等三角点の地方別の配置図と全国の一等三角
点の総覧が付いている。一等の山100座を紹介。地図
図が大きく見易い。

「第20巻」 一等三角点の山々

A5判・310頁・定価1680円(税込)
一等三角点の山シリーズ。280山の総索引と高度順
一等三角点100座が付いている。80座を紹介。

第9巻、第18巻、第20巻のガイドの山は重複しません。

新ハイキングの見本誌はハガキで申し込みれば無料で送付します。

新ハイキング社 〒114-0023 東京都北区滝野川7-6-13
電話・FAX 03(3915)8110

都訪問予定。当会は二十八日夕刻より歓迎パーティーを国際文化会館で開催し、京都は京都支部を中心に歓迎を予定している。

六、各委員会報告

財務委員会・村井(龍)

月次会計報告。会員数五九八五名。会報編集委員会・村井(葵)

『山』四月号は、「ポール・トゥ・ポール石川直樹会員」「会員アンケート報告」等が主な特集記事。

青年部・松原

「日本山岳会青年部」として、現在の固定メンバー十数名が国内の山を精力的に登っている。そこで、有事の際の在京本部としてのルーム使用許可、緊急時の当座費用の借用、緊急時の連絡体制について協力要請があった。当会としては、当然前向きに対応することとしたが、「山行計画書」を必ずルームに置いておくことが条件であることを確認した。

自然保護委員会・河西

①高尾の森づくり(小下沢風景林の森づくり活動)の平成十三年年度年間活動計画書(別添資料あり)を、東京神奈川森林管理署長宛に提出した。
②高尾の森「植樹祭」を四月十五日に行う。現在、二五〇名程度の参加予定になっている。

学生部指導委員会・宮崎

日韓学生友好登山交流を、四月二

日より四月十日まで、谷川岳、岩原スキー場をメインに実施した。好天続きで疲れた者も出たが全員無事に終了した。

海外連絡委員会・増山

カザフスタン登山財団より、当地における岩登り大会への招請状がきている。参加資格が十四歳より十七歳までの四人組となっているが、関係者で候補者はいないか。

医療委員会・増山

三月十日より十四日まで、カナダのジャスパーにおいて、第十二回国際低酸素学会が開催され、増山の他中島道郎、堀井昌子、志賀尚子、山本正嘉の各氏が参加した。今回は、高地馴化や高地での運動能力と関係するかと注目を浴びている、いくつかの遺伝子の可能性が調べられ報告された。ただし現在では、この領域ではクリアカットな結果を出すのは難しい。

山研運営委員会・坂本

四月二十九日のオープンに向け、先日偵察に入った。雪解けによる漏水があり補修が必要。四月二十六日より準備をして、予定どおり今シーズンの幕開けとしたい。

その他

①韓国登山文化院孫慶錫院長より、寄贈図書(西村、増山、松原各理事による合計五十六冊)にたいする受

領御礼があった。(西村)

②評議員会は四月十七日(火)午後一時より開催予定。

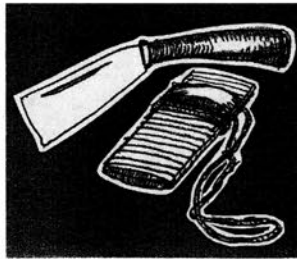
■会員異動

物故

山口 暁(九四二七) 01・3・13
山口力男(二〇七八二) 01・4・17
退会

日向泰子(二二〇四四)
田淵純也(二二九七五)
ダビド・センジャク(二二一五二)

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆気象講座「雲と前線」

科学委員会

今年の気象講座は「夏に生じやすい雲の形から、前線の状態と天候の変化を予測する」ことを学びます。夏山登山を計画の中の方はぜひご参加ください。

日時 六月二十七日(水) 十八時三十分～二十時

会場 日本山岳会集會室

講師 城所邦夫会員(元日本気象協会)
問合せ 北野忠彦まで(〇九〇・三〇四六・一一八九)

◆第十八回全国支部懇談会

主管・石川支部

年一回の全国支部懇談会です。片山津温泉で親睦を深め、初秋の白山を歩きます。大いに楽しみましょう。

日程

九月二十九日(土) 受付十三時懇談会十六時 懇親会十八時
会場 加賀市片山津温泉「あたかや 佳水郷」

*日本百名山の写真パネル展示あり。
九月三十日(日)

登山 白山スーパール林道三方岩岳(二七三六メートル)

観光 中谷吉郎「雪の記念館」

江沼神社「深田久弥記念碑」

北前船記念館他

費用 二万二千元(自家用車利用は一万九千元)

申込 ハガキに住所、氏名、性別、

年齢、会員番号、電話番号、

所属支部名、参加コースを明

記し織田伸治宛(千九二一・

八二三)金沢市しじま台二・

二三・八 四・〇七六・二二

〇・二二九五〇勤務先 〇七

六・二九八・七二四(自宅)

*申込者には詳細案内を送付します。

◆自然児学校の開設日程

北海道支部

昨年開催の第一回自然児学校では、子供たちとともに大自然の中で暮らし、自然保護の大切さとともに学びました。本年は次の日程で開催します。親子での参加大歓迎します。

日程 八月二日(木)～五日(日)

場所 新冠町イドンナツ川上流域

内容 一般募集の親子を対象に、三泊四日のテント生活で自然観察、動植物の学習や飯盒炊飯、

キャンプファイヤーなどの体験学習を行います。

募集人員 子供二十人(小学四年以上、中学生まで。親同伴も可)

費用 子供八千円、大人一万二千元
*プレ行事として六月九日～十日

八剣山、七月八日空沼岳、一日～二日イグルーづくり体験を予定しています。

問合せ 向井成司実行委員長(TEL・

〇一四六四・七・六六一)

◆第十四回山行「櫛形山」

つくも会(99同期会)

梅雨の晴れ間?を縫って、山歩きを計画しました。JACC会員の参加をお待ちしています。

日時 七月十四日(土)

場所 櫛形山

集合 JR新宿駅六番ホーム六時三十分

行程 池の茶屋林道～丸山登山道

申込 七月四日までに、ハガキに会員番号、氏名、連絡先を明記し、日本山岳会気付「つくも会事務局」宛倉祥子宛

◆奥日光・光徳懇親例会

95同期会

営業小屋とは一味違った宿泊気分を味わえます。同期以外の方もぜひご参加ください。

日程 七月十四日(土) 十八時懇親会

七月十五日(日) 大真名子、小真名子

真名子

宿泊場所 奥日光 学習院光徳小屋

費用 八千円程度

申込 会員番号、氏名、性別、年齢、郵便番号、住所、電話、FAX

を明記して七月五日までに阿

世知義幸宛(〒一八七・〇〇〇

〇四小平市天神町二二〇六・

四〇一 FAX 〇四二・三四四・

五七七八)

e mail: asechi@sigma-photo.co.jp

*申込者には詳細案内を送付します。

◆編集後記◆

会員一人ひとりと親しく接するよ
うな気持ちで、全力を込めて会報に携わってききましたが、本号をもって任期満了となります。読んでくださったすべての会員とご支援ご協力いただいた方々に心より感謝します。

アルパイン・クラブなのだから活力の源泉といえる山登りの実践を巻頭で取り上げるよう腐心したつもりです。変化と多様化の波にもまれながら、個人的にはかなり前から組織登山の終焉を強く感じていました。それを進歩と捉えるかそうでないかは議論のあるところでしょう。編集者としてはプラス思考で、本来あるべきアルピニズムの原点に立ち戻る大きなチャンスと考えます。

当初、多感な若者を呼び込むために「若者のページ」を組むつもりでしたが、果たせずじまいでした。若者の動向に注目し続けてきたところ

昨秋、青年部が季刊誌『きりぎりす』を発行しました。これはJACCにと

って福音といえます。混沌とした登山界にあっても、純粹に何かを希求する好奇心豊かな若者は存在しています。学生山岳部が衰退する現在、

全国の志ある若者諸君が、「きりぎりす」を核に、大いに論陣を張り、切磋琢磨してアクションにつなげてほしいと思います。固定観念を捨て、

開放的になればいい! 萎縮しないで羽ばたけ! 知恵を出し合えば道は拓けます。山があつて人がいる以上、山登りは永遠でしょう。会心のクライミングは煎じ詰めれば個の目覚め以外の何ものでもない。力を発揮できる年代は限られています。貴重なチャンスは逃さないでほしいと思います。

今後、今村千秋編集人以下のスタッフ

が適時に若者の声を取り上げ、

広くPRし、その活力が全国各支部

にも波及すればと願っています。

新編集委員

理事・今村千秋

委員・村井葵 小倉厚 江本嘉伸

高橋重之 高原三平 奈良原町子

渡邊玉枝 高原浩志

原稿送り先 今村千秋(〒一九四・

〇〇三二 町田市本町八一三・四

TEL&FAX 〇四二・七二一・一六六六)

e mail: jac-kahno@jac.or.jp

(村井 葵)

日本山岳会報 山 673号

2001年(平成13年)6月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

ホームページ: http://www.jac.or.jp

Eメール: jac-info@jac.or.jp

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社

今年もさくらで会いましょう